

マングローブ林の水産資源維持培養の効果に関する研究

マングローブ林のノギリガザミ等有用水産生物の稚魚期の生育に及ぼす影響の解明 (要約)

海老沢明彦、仲本 光男、*翁長 誠

目的及び内容

本調査は科学技術庁地域流動研究として「マングローブ林を中心とした生態系解明に関する研究」として沖縄マングローブ協会が研究委託を受け、その一部を沖縄県水産試験場が「マングローブ林の水産資源維持培養の効果に関する研究」という名称で再委託を受けて実施している調査研究である。そのうち八重山支場では「マングローブ林のノギリガザミ等有用水産生物の稚魚期の生育に及ぼす影響の解明」という名称で宮古島嘉手刈の入江湾を主調査地としてノギリガザミの資源生態調査をおこなっている。本調査は平成2年は稚ガニ調査、親ガニ資源量調査、底生生物量調査を行ったが、委託に関する諸々の事情で調査開始が同年の11月と遅れたため初年度は十分な調査が実施できなかった。そこでここでは要約のみを報告する、なお本調査を実施するに当たって現地の案内、用船の手配など大変御世話になった下地町役所経済課水産係の池間隆男氏及び宮古支庁水産係の方々に深く感謝する。

稚ガニ調査は11月、1月、3月に行ったが稚ガニが発見できたのは湾奥部に群生するマングローブ林内の小水路とマングローブ林直前の干潟上の水路のみで、11月は9尾(甲幅範囲35-99mm、1月及び3月はそれぞれ3尾(同29-45mm, 25-41mm)発見された。親ガニ資源量調査はカニ籠を用いて採集-標識放流を繰り返し湾内の標識ガニの数を増加させていき、その混獲率から Petersen法で資源尾数を推定した。その結果3月の湾内の資源尾数は250尾程度と推定された。この時の甲幅範囲は8-17cmで大半は8-13cm程度の若令群であった。湾内で漁獲が多かったのは湾奥部のマングローブ林前面の水深の極めて浅い所であった。底生生物量調査は湾内12地点で直径20cm、目合0.5mmの分析フルイ開口部を海底面に押し込みその中の泥をすくいとり、そのフルイで濾し残った生物を同定、測重した。主要出現生物はゴカイ等の環形動物、二枚貝、カニ類であった。

* 非常勤職員